
アリスとナイト

未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスとナイト

【Nコード】

N2372I

【作者名】

未来

【あらすじ】

ごく普通の女子高生、佐東織姫は、双子の姉、舞姫といつも一緒にそして、二人の幼馴染で、超力ツコいい悠真とで、いつも3人で日々を過ごしていた。

そんな3人はある日、どこが別の場所に飛ばされてしまう。

その世界は、『アリス』という名の女王が国を統べる国だった。

そして、その時期アリス候補が織姫と舞姫だと告げられ、アリスにならなければ3人は元の世界に帰れない。

でも、そのアリスになるには一人の騎士ナイトが必要で、その候補は、な

んと悠真だった。

ファンタジーな世界で戦争し、三角関係LOVEです

あたしは、知らないうちにあたりが真っ白で、何も無い部屋に立っていた。

「織ちゃん！」

何……？

誰かがあたしの名前を呼んでる？

「舞！」

そこには、小さい女の子二人がいた。

何で舞の名前も知ってるの？

顔を見せて？

貴方達は

「……誰？」

目を覚ますと、そこはいつも通り、あたしの部屋のベッドの上で

あたしの名前は、さとう佐東 おじこめ織姫。通称織。

普通の女子高生で、特技はピアノと料理と歌。

「織ちゃん！ 織ちゃん！ 悠真がもう外にいる〜！」

……はいはい。

今、あたしの事を『織ちゃん』と大声で呼んだ奴は

さとう佐東 まいひめ舞姫。私の双子の姉の方。

「ハイハイ。ほら、早くしないと遅刻しちゃうよ？」

「それもそうだね、織ちゃんの言うとおり学校行く？ 悠真！」

「……舞がそーゆーなら」

『舞が』と悠が言って、少しモヤっとしたのは別の話です。

おはよオオオオオ！ 悠真くん！」

学校に無事着き、毎朝恒例、悠真君コール。

「悠、これ迷惑じゃない？」

「まーな」

そういつつ、おはよう、と返事をする悠。

何か隣で凄い殺気出してる奴発見。

……舞は悠のことが好きなんだよね。

正直言ってお似合いだと思う。

悔しいなんて思わないけど

「あのね、舞、あたし今朝ね

」

そういつた瞬間。

あたりが今朝の夢のように、ふっと真っ白になった。

さっきまで悠真コールしてた子達が居ない。

(え ?)

「織ちゃん！ これどうなってるの!?!」

やだ、今朝の朝と同じ

!?!

「あたしに聞かないで！ ちょっと・・・・・・・・悠!?!」

「織姫！ 大丈夫か!?!」

「平気だけど

」

その時。

その白い時空は、どこから来た黒と混ざり・・・・・・・・

「え・・・・・・・・何!?!」

「きゃあああああ」

「わあああああああ」

私達は暗闇に飲まれていった。

2 (前書き)

起承転結が早くても気にしないで下さい。
スルーです、スルー。

「ん……………」

私が目を覚ますとそこは、知らない森の中。

見上げると、広い大空が広がっていて、向こうには湖が見える。

「あ！　ねえ、起きてよ悠、舞！」

私は二人を起こそうとするけど、思った以上に起きない。

「嘘……………どうしょよ」

頭の中が真っ白になった私は、とりあえず湖に行き、水を持ってくることにした。

森の中を、走って走って走って、やっとたどりついた湖。

そこは信じられないくらい綺麗で、透き通る水はとても冷たかった。

「綺麗……………ん？」

私が見上げると、ふつと見えた建築物。

それは……………

「し……………城オ!？」

全体的に白くて、すごい大きな城。

「………何処なの!？」

日本にこんな城があるとは考えられないし、こんな綺麗な湖も見た事が無い。

それに……………。

空を見上げると、見た事の無い鳥が飛んでいる。

「ここは、フロリアです」

「え……………?」

後ろをむくと、そういった人の顔も見れずに、私の意識は遠のいた。

あれ……………。

私、今まで何してたんだっけ。

あ、そっか、悠達と変な森に行っちゃったんだっけ?

……………アレ?

ここどこだっけ?

アレ? 舞 ?

「舞イイイイツ!」

「お目覚めですか? アリス様」

私が目覚めると、そこは豪華な部屋だった。

目の前にはカワイイ女性の方。

そして、私は綺麗なワンピースを着ている。

……………何故??

「あ！ ちょっと！ 舞達のトコに返してよ！」

「ご心配ありませんわ。時期アリスのもう一人の候補と、時期ナイト候補もアリスの隣で寝ていらっしやいます」

そっぴいなながら、花瓶に花を活けている。

「アリスって誰！？ それに貴女は……………」

ニコッと笑うと、コッチのほうに向かってきて、私に言う。

すごい綺麗……………妖精みたい。

「私はリアと申します。もうすぐ女王がいらっしやいますので、それより少しお待ちになられてください」

「ん……………？ 女王って？ それにここ何処？ 地球上の日本よね！？」

「地球上だということには変わりはありませんが、織姫様たちのいた時空ではありません」

時空……………？ 女王……………？ 何言ってるの、この人。

「ちょっと待ってよ、そんなの知らない！」

と、その時。

目の前の扉が勢いよく開いたと思ったら、背の高い美人な女性が入ってきた。

「王女様！」

リアが叫ぶ。

「……………織姫さん、ごめんなさいね。手荒なまねをしてしま
つて……………」

いきなり謝るその人は、妖艶な笑みを見せた。
私はただ、ボーっとするのみ。
この人、どこか懐かしい。

「ん……織ちゃん？」

「織姫、ここどこだ？」

「お連れの方々も起きたようですわね」

その王女様は、私の方に近づいてきた。
怖い、それが第一印象……………！

「嫌ッ……………！」

私は、ベッドから逃げる間もなく、腕をつかまれる。
その手を振り解こうとするが、振りほどけない。

「ちょっと……………！ 離してッ！！」

ヤバイ、泣きそうだ……………、そう感じて目を閉じる。
すると悠がベッドから飛び降りて叫んだ。

「止めるって言うてんだろ！？ 離せよその手ッ！！！！」

(悠　　！)

隣で舞が泣いているのか、声が聴こえた。
すると、王女は笑っていった。

「許してね、織ちゃん　　！」

(何で私の名前　　知ってるの?)

私が頭の中で考えていると、腕に何かを付けられた。
嫌だ……お母さんッ！

「!?!」

半泣き状態で私が目を開けると、その付けられたものが、凄まじい
勢いで光を放っていた。

「綺麗じゃない……織ちゃん！」

「どうして……私の名前？」

私が質問すると、舞がそつと呟くように答えた。

「お母……さん？」

「はあ!?　　織姫、お前の母親って　　!?!」

悠が驚くのもしょうがない。
だって、私達のお母さんは……。

「流石、舞ちゃんね」

と、ニコツと笑う。

「え………じゃあ、貴女は………」

信じられない。

いや、そんなの嘘に決まってる。

私のお母さんが王女!?

ありえない! そんな馬鹿馬鹿しい詐欺に私は引つかからない!

「織ちゃんはまだ信じられてないのよね………本ツ当にあの人にそっくりだわ」

「だって、そうでしょ!? 確かに貴女はお母さんに似てるけど………私達のお母さんは病気であの時死んじゃったんだから!!」

わわわわ………わけわかんない。

「織姫、この世界ってまさか天国か………!?!」

悠がそう言った。

天国う!?! 私達死んじゃったの!?!?

ありえないよ!

「じゃあ、このネックレス、覚えてるかしら?」

「その前に天国かどうかを………話してッ!」

私は半分狂ってる。

訳分かんなさすぎて笑えてくる。

あんた等・・・・・・・・言ってる事もやってる事もメチャクチャだよ！

「とりあえず、織ちゃんは落ち着いて？ 今、この世界も、私の事も、織ちゃんと舞ちゃんの生まれつきの使命も・・・・・・・・包み隠さず話すから」

そう王女が言って、私達はとりあえずついていった。

「え……………?」

私達は、すべての事をお母さんから聞いた。

ここは、お城の中で、どうやら、私達双子は元々、コチラの世界の住人。

そしてお母さんは、その中の一つの国を統べる王女だということ。

私達はその時期王女候補で、私と舞以外にも候補はいて、その人たちを含めて戦わないといけない事。

私達は生まれつきに、コチラの世界で発揮できる力を持っているということ。

王女は、神の称号、『アリス』の名前をもらえるという事。

『アリス』になるには、それに使える『ナイト』が必要で、その候補が悠と言つこと。

悠は今、別の部屋で、今のナイトから説明を受けている。

そして、一番の問題は

「私と、舞が、戦う

」?

「そんな事、出来ないよお母さん!」

舞が泣く。

私はただ、何も出来ずに立ち尽くすだけ

「いらないから……………」

「織……………ちゃん?」

お母さんが哀しそうな目で私を見る。

「そんな地位要らないから！ 要らないから舞と戦う事だけはしたくな……」

「織ちゃん！」

私の言葉をかき消すかのように、お母さんは叫ぶ。
はつとすると、舞はもちろん、お母さんも泣いていた。

「そんなこと言わないで……それはこの世界のルールに反するの。いい？ アリスになりたい人はこの国以外でも沢山いるの。そんなこといったらその人達から」

その次に出てきた言葉は、私の想像を絶する言葉だった。

「殺されるわ」

「

殺される？

ころされる、コロサレル

。

私の頭の中に、その言葉が渦を巻く。

「いい？ 織ちゃん、舞ちゃん。貴女達は、私よりも強大な魔力を持っているの。だから、きつとすぐに命を狙われるわ。だから、私の知り合いに先生をしている人がいてね？ その人に、教えをつけてもらうから」

お母さんはそれだけ言って、部屋を後にした。

「織ちゃん」

「舞……私達、これからどうやって生きていくの？」

「分からないよ……」

そのとき。

目の前の扉が開き、悠が入ってきた。

「悠真……」

舞が安心したように呟いた。

「俺も何か説明受けた……」

悠真も……。

何か嫌な予感がする。

「俺さ……」

時期ナイトなんだって「

やっぱり。

私の予想が当たった。

「で、何か着くアリス、織姫か、舞か、ドッチか決めろって……」

これは予想外。

舞も驚いた顔をしている。

私はその空気に耐えられなくて………。
責任なんて取れないし、行苑も無いのに、言ってしまった。

「悠、舞のところについてあげて」

私は、そのまま部屋を出て行きく。

「え………！ 待てよ！ おい！ 織………」

「待って！」

「え………？ ちょ、舞、お前何言つて………」

「行かないで、悠………」

私は、ドアに張り付いて二人の会話をここまで聞いて、お城をでた。

「はぁ……………」

別に……………別に、悔しかったわけじゃない。

ただ、悠が守りたいほうを、自分に嘘つかないで選んでほしかった。何より、舞を悲しませたくない。

「ん？　ここ、何処だろう……………」

気が付くと、私は全然知らないところにきていた。
ヤバイ……………。

(目の前崖だし!!!!)

ここ、森じゃん！　さっきの!!

「はぁ……………帰りづらいなあ」

私は、とりあえず木の下に座る。
すると……………。

「……………どっしたの？」

「えッ!?!」

後ろを向くと、これまた美形な、背の高い緑色の髪をした男の子……………。

「え〜つと?」

「僕はゼロ。まあ……………この国の時期ナイト。君と同じ立場だよ」

「私は、織姫、時期アリス……………。皆からは織とか、織ぢやんとか、呼ばれてる……………」

私は、なんとなく笑顔になれなかった。
どうして……………?

「笑うといいよ」

「え……………? 何で?」

「織姫さん?」

「織でいいよ」

私は答えた。

夕焼けが憎たらしくらい輝いている。

「じゃあ、織。アリスは、絶対にね? 何があっても笑っていないくぢやならないんだよ。そうじゃないと、国民はついてこないから……………」

国民。

よく考えたら、私が将来この国を動かすことになるのかもしれないんだ。

「気になる人が、私以外の人に付きちゃっても？」

「取り返せばいいじゃないか？」

と、ゼロは言った。

「違う………。あの人が付いたのは、私自身も大切な人なんだ……。」

「それなら」と、ゼロが笑った。

「僕が、織を守るから

」

私は耳を疑った。

「私を……。あつて間もないのに、私のナイトになるの？」

「うん

私は信じられなかった。

こんな私でもいいのかな……？
ゼロについていても。

私は。

考える前に、私は答えを出していた。

「お願い・・・・・・・・だよ？」

ゼロは、笑っていた。

・・・・・・・・最初は、この笑いがただの喜びから来るものだって、
そう思ってた。

だけど・・・・・・・・。

この笑いは、そんな物じゃない、黒い心を隠すための笑いだったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372i/>

アリスとナイト

2010年10月17日11時24分発行